

經濟論叢

第七十四卷 第五號

-
- レーニンの市場理論について……………田 中 眞 晴 (1)
- 封建地代とブルジョアの發展……………山 田 浩 之 (19)
- 攝河棉作地帯における農民の動向……………脇 田 修 (35)
- 阿波藩における葉藍專賣制度の成立過程…大 槻 弘 (58)
- マルクスの「經濟學批判體系」と
レーニンの「帝國主義論」……………吉 信 齋 (80)
- 最高入先出法の批判的考察……………高 寺 貞 男 (97)
-

[昭和二十九年十一月]

京都大學經濟學會

マルクスの「經濟學批判體系」と

レーニンの「帝國主義論」

吉 信 肅

は し が き

スターリン論文の發表以來、「現代資本主義の基本的經濟法則」についての研究が數多く呈出されている。私が今ここに試みようとするのは、この法則の間接的な、しかも方法的な把握の仕方に関するものであつて、マルクスの「資本論」あるいは「經濟學批判體系」とレーニンの「帝國主義論」との關係を問いただすことによつて、これをなすとげようとするものである。レーニンの「帝國主義論」は資本主義に関するマルクス主義經濟學の一般理論の直接的繼續である。「帝國主義論」をこのように位置づけることによつて、「現代資本主義の基本的經濟法則」『「最大限利潤の法則」の正しい方法的把握も可能になるのではないかと思われる。勿論、これも私の一試論に止まるのであつて、論者の叱正をまちたい。尙、本稿は昨年十一月の本誌「マルクス死後七十年記念號」に發表した「マルクス『經濟學批判體系』研究序説」に續くものである。

一

周知のように、マルクスの「經濟學批判」(一八五九年)序言の冒頭に次のような句がある。「私はブルジョア

經濟の體系をつぎの順序で考察する。——資本、土地所有、賃労働、それから國家、外國貿易、世界市場。」このマルクスによる體系の指摘は、一八四三年頃からマルクスによつて行われた經濟學の系統的研究の成果と見なすことが出来るのである。この「經濟學批判體系」の構成は、一八五七年の「經濟學批判序説」に始めてマルクスによつて確認されたものであつて、それから一八五九年二月一日付のワイデマイヤー宛への手紙に至るまで、マルクスは、手紙あるいは草稿において、度々この編別についてふれていたのである。

その後のマルクスの研究も細部の手入は別として、この敷き詰められた軌道の上につていたと考へて誤りないものと思われる。一八六七年には「經濟學批判」の續卷として「資本論」第一卷が發行された。マルクスは第一版への序言を次の言葉を以つて始めている。「私、がその第一卷を公衆の手に委ねんとするこの著作は、一八五九年に公けにされた私の著述『經濟學批判』の讀きをなす。初めと續きとの長い休止は、私の仕事を度重ねて中斷した長年にわたる病氣のせいである。」

われわれは現行「資本論」の中において、かの體系との連關を處々に見出すことが出来る。「資本論」は、かの雄大な體系が常にマルクスの胸中にあつたことを示しているのである。そして、現行「資本論」全四卷（第四卷は「剩餘價值學說史」）はその核心的部分と見なすことが出来る。

「資本論」の序文には「近代的社會の經濟的運動法則を暴露することは本著の最後の窮極目的である」と述べられてゐるが、これは簡單なる範疇から複雑なる範疇へ、商品から世界市場として恐慌へと向上することによつて、あますところなく達成されるであろう。なんとすれば、マルクスが指摘しているように、「世界市場をつくりだす傾向が、資本という概念そのもののうちに直接あたえられている。どんな限界も征服さるべき制限としてあらわれ

る」からである。更に、マルクスは恐慌の現實化に對して次のように述べたのである。「この（恐慌の）引用者）可能性の現實性への發展は、單純な商品流通の立場からはまだ全く質存しないところの、諸關係の全範圍を要求する。」⁵⁾ 世界市場においては、あらゆるモメントが指定され、同時にあらゆる矛盾が運動している。従つて、マルクスが、「世界市場と恐慌」といつているのもまた當然のことと思われるのである。

われわれは、マルクスの「經濟學批判體系」における「世界市場」という範疇が如何なるものであるかを、マルクスの著作を通じて、やや詳細にさぐつて見たいと思う。そうすることによつて、この側面から、「體系」の意義が明らかになると思われからである。

- (1) マルクス「經濟學批判」字高譯日本評論社古典文庫版一九頁
- (2) マルクス「資本論」第一卷長谷部譯青木書店版六九頁
- (3) 同七三頁
- (4) マルクス「『經濟學批判』の準備勞作から」大月書店版マル・エン選集第九卷三三三頁
- (5) マルクス「資本論」第一卷二三四—二三五頁
- (6) マルクス「經濟學批判」三六〇頁

二

マルクスは「剩餘價值學說史」第三卷において次のように述べている。「外國貿易即ち市場の世界市場への發展のみ、よく貨幣を世界貨幣に、抽象的勞働を社會的勞働にまで發展せしめる。抽象的富、價值、貨幣——従つて抽象的勞働は、具體的勞働が世界市場を包括せる種々なる勞働様式の總和にまで發展し來る程度に應じて發展する。

資本主義的生産は價値の上に、または生産に含まれている労働の社會的労働としての發展の上に根元をおいている。しかしこのことは外國貿易ならびに世界市場の基礎の上においてのみ可能である。それ故、これは資本主義的生産の結果であると同時に前提でもある。」¹⁾ (ゴチック＝引用者)

このマルクスの命題は、さしあたつて歴史的側面から觀察することが出来る。歐洲經濟史の教えるところによれば、十五世紀から十六世紀にかけて劃期的な「地理上の新發見」が行われ、それは國際貿易のみならず歐洲諸國の經濟生活一般に大きな變化をもたらした。それは、アダム・スミスの言葉をかりるならば、人類史上に記録された最大にして最要なる出來事であつた。

「アメリカの發見、アフリカの廻航は、勃興しつゝあるブルジョアジーのためにあたらしい活動分野をつくりだした。東インドと中國との市場、アメリカの植民地との貿易、交換手段と商品一般との増加は、商業を、航海を、工業を未曾有に躍進させ、崩壊しつゝあつた封建社會内の革命的な要素をこれによつて急速に發展させた。」²⁾

「工場制手工業、そして一般に生産のうごきは、アメリカと東インド航路の發見からもたらされた交通の伸張によつて、巨大な飛躍をとげた。それらの地方から輸入されたあたらしい生産物、ことに大量の金と銀——これらは流通面に投じられ、階級相互間の關係を總體的に變化させ、封建的土地所有と労働とにひどい打撃をあたえた——各地への探險隊、植民、そしてとりわけ、このころから可能となり日ましにいちじるしく達成されていつた市場の世界市場への擴大、これらのが、歴史的發展の新局面をよびおこした。」³⁾

「世界貿易と世界市場とは十六世紀において資本の近代的生活史を開始するのである。」⁴⁾

以上のマルクスの言葉は次のことを意味している。すなわち、これらの地理上の新發見に伴い商業上に起つて商

人資本の發展を急速に高めたところの大革命が、封建的生産様式の資本制生産様式への移行を促進させることに依つて一つの重要なモメントをなしているということ、生産の封建的諸制限を粉碎するために本質的に貢献したということ、世界市場が資本制生産様式の基礎を形成したということである。しかし、この基礎あるいは前提をなすということはそれ以上の意味にとられてはならぬ。資本制的生産様式は、世界市場の發展とは全々異つた諸事情によつて條件づけられたのである。「近代的生産様式は、その第一期すなわちマニユファクチュア時代においては、ただそのめの條件が中世の内部で生じていたところでのみ發展した」のであつて、「商業の突然の擴張および新たな世界市場の創造が舊生産様式の衰微と資本制的生産様式の興隆とに壓倒的影響を及ぼしたとしても、こうしたことは逆に、ちやんと出来上つた資本制的生産様式の基礎上で生じたのである。」⁵⁾

歴史的に世界市場が資本制的生産様式の前提をなすという意味は以上の如くであるが、次に世界市場が資本制的生産様式の結果として現われるという意味を検討しよう。

十八世紀の最後の三分の一期にいたるまでは、資本制的生産様式をもつとも早く發達せしめたイギリスにおいても、マニユファクチュア時代にあつた。だが、この間にあつてイギリスの商業は著しく發展し、「産業革命史」の著者トインビーの指摘によると輸出額は十八世紀の初めの七〇〇萬ポンド見當から一七六〇年の一四五〇萬ポンドまでが増大していた。マニユファクチュアの手勞働をもつてしては擴大する市場の需要を満足しえないようになつた。需要の生産に對する急テムボの増大——これが産業革命の一機縁をなしたのである。

「十七世紀に、商業と工場制手工業とのイギリス一國への集中が制上しがたいいきおいですんだ結果、イギリスにとつてしだいに一個の相對的世界市場が、したがつて同國の工場制手工業生産物にたいする需要がつくりださ

れ、この需要は、従來の産業上の生産諸力によつてはもはやみだされることができなかつた。生産諸力をおいぬいたこの需要が、大産業——種々の産業上の目的への自然力の應用、機械および最大限にまで擴張された分業——をうみだすことによつて、中世以來の私的所有の第三期をまねいた推進力であつた。……大産業は……競争を普遍化し交通手段と近代的世界市場とをつくり、商業を自己に従屬させ、いつさいの資本を産業資本に轉化し、そしてそれとともに、諸資本の迅速な流通（貨幣制度の完成）と集中とをうみだした。」（傍點——引用者）

「市場はたえずひろがり、需要はたえず増加した。マニユファクチュアもまたふじゆうふんになつた。そのとき蒸氣と機械が工業生産に革命をおこした。近代的大工業がマニユファクチュアにかわり、工業的中間層にかわつて産業的百萬長者が、全産業軍の指揮官が、すなわち近代的ブルジョアがあらわれた。

大工業は、アメリカの發見によつてすでに準備されていた世界市場をつくりだした。」（傍點——引用者）

近代的大工業が、すなわち産業革命が近代的、世界市場をつくりだしたのである。だが、資本制的生产様式の本來の任務が世界市場をつくりだすことにあつたとすれば、これは同時に世界市場の大暴風雨をも意味していたのである。一八二五年にイギリスにおいて生じた第一回の資本制的周期的恐慌こそは、資本制的生产様式が幼年期から脱し自らの足でたち上つたことを示すものにはかならない。このように、世界市場は資本制的生产様式の歴史的结果として現われたが、それは同時に資本制的生产様式の死相としての恐慌とはなれがたく結びついていたのである。

「工場制度の老成で飛躍的な擴張可能性とその世界市場への依存性とは必然的に熟病的な生産とそれにつづく市場の充溢を生みだすのであるが、市場が收縮するとともに麻痺状態が生ずる。産業の生活は、中位の活氣・繁榮・過剰生産・恐慌・停滞の諸時代の序列に轉化する。」⁸⁾

「機械制工場が非常に深い根をはり、それが全國民生産のうゑに壓倒的影響をあたえはじめたとき、そのため外國貿易が國內商業にたいし優位を示すようになり、アメリカ、アジア、オーストラリアに世界市場が相次いで擴大された領域を獲得したとき、最後に、挑戦に應ずる工業國民が十分多數になつたときいはいはじめてかの常に反復される循環が登場してきたのであり、この循環の諸局面は數年を要し、それはいつでも一般的恐慌にみちびき、この一般的恐慌は一つの循環を完成し、新しい循環を開始させるのである。」¹⁾

前提および結果としての世界市場の歴史的意義、ならびに世界市場と恐慌の現實的歴史的關聯は以上の如くてある。進んでわれわれは、これを論理的側面から取扱うことにしよう。

- (1) マルクス「剩餘價值學說史」第三卷改造社版マル・エン全集第一一巻三〇五頁
- (2) マルクス・エンゲルス「共産黨宣言」マル・エン選集第二卷四九一頁
- (3) マルクス「ドイツ・イデオロギー」マル・エン選集第一卷六六頁
- (4) マルクス「資本論」第一卷二八三頁
- (5) マルクス「資本論」第三卷四七三頁
- (6) マルクス「ドイツ・イデオロギー」六九一七〇頁
- (7) マルクス・エンゲルス「共産黨宣言」四九一頁
- (8) マルクス「資本論」第一卷七二八頁
- (9) 同 Dietz 版九六三頁

三

論理的側面から世界市場が資本制的生産様式の前提および結果であるということを考察するに際して問題となる

のは、かの「經濟學批判體系」における世界市場の位置づけである。從來、このマルクスの「プラン」とよばれるものは、書き残された限りの殆んど全部がすでに我が國に紹介されたものと思われていたのであるが、先般、東獨でリプリントされた「經濟學批判」執筆のための老大なマルクスの草稿中に、日本では未發表の新たな「プラン」に對する指示が見出されるのである。この「プラン」に對する指示は世界市場の論理的な位置づけに對して、重要な意義を持つものと思われる。マルクスは次のように述べている。

「交換價值、貨幣、價值が考察されるこの第一部においては、諸商品は常に現存するものとして現われる。形態規定は單純である。われわれはそれらが社會的生產の諸規定を表現していることを知っているのであるが、それ自體は前提である。しかし、それらはこの規定の中で規定されているのではない。また、そうであるからして、實際に、最初の交換は生産の全體を把え、且つ規定することのない餘剩物の交換として現われる。それは交換價值の世界の外部に横たわつてゐる總生産物の現存の餘剩物である。このようにしてまた發展せる社會においては、なおこれは直接に現存する商品世界として表面に現われ出る。しかしながら、それはそれ自身によつて、生産諸關係として規定されている經濟的諸關係を目指して、それ自身を超越するのである。それ故に、生産の內的編成が第二部を構成する。國家における總括は第三部であり、國際的關係は第四部であり、世界市場は生産およびそのあらゆるメントが統體として規定され、同時にまた一切の矛盾が進行するところの最後の部である。従つて再び全く同様に、世界市場は全體の前提とその擔當者をなすのである。従つて、恐慌は前提をこえた一般的超越である。また、恐慌は新しい歴史的姿态の採用への促進者である。」(ゴチック＝引用者)

ここにおいて、世界市場は前節の最初に示した「剩餘價值學說史」からの引用におけると同しく、前提および結

果として表現されている。さきの引用とは異つて、ここではそれが體系的に位置づけられて注目される點である。世界市場は諸範疇の前提と擔當者を形成すると同時に、その結果として現われるのであつて、資本制的生産の前提と結果が、「體系」において統一されているのである。いふまでもなくマルクスのいう「體系」は、抽象的なものから具體的なものに向つて、諸範疇の論理的な位置づけとして、従つてまた基本的矛盾の深化の過程として把握されねばならない。「體系」において、世界市場は資本制生産のあらゆるモメントの統體として結果としているのであつて、しかもこのあらゆる矛盾が恐慌として爆發するや否や、それは同時に再び全體の前提と擔當者となるのである。「體系」は圓環的に完結するように見えるが、恐慌は單なるくり返しとして現われるのではなく、より大きな規模での矛盾の發展を準備するものとして、従つてまた新しい歴史的姿態の採用、社會革命の促進者として現われるのである。マルクスは恐慌に對する以上のような見解を一貫して主張している。

「恐慌は……ブルジョアの生産過程の一切の要素の矛盾が爆發するところの世界市場の大暴雨である。」
「世界市場恐慌は、ブルジョア經濟のすべての諸矛盾の現實的な包括および強制的な解決として把握されねばならぬ。従つて、この恐慌のうちに包括される個々の諸モメントは、ブルジョア經濟のあらゆる部面に現われてそして發展せしめられずにはいないものであり、またわれわれがブルジョア經濟の中に突き進めば進むほど、一方ではこの矛盾の新たな諸規定が發展し、他方ではそのより抽象的な諸形態がより具體的な諸形態において再現し成立することが明かにならずにいないのである。」³⁾

かくして、恐慌の可能性の現實性への發展は「世界市場」において完成されるものと考えられる。「世界市場」において始めて諸關係の一全範圍が措定されるのであつて、それは同時に現實性としての恐慌を意味しており、

「恐慌の原因は」という問に對する解答もここに與えられることになる。更に、マルクスが「資本論」を商品からとておこすに當つて、資本制的生産様式が支配的に行われる諸社會を念頭においたという意義も「世界市場」の前提を通して始めて正當に評價されるであらう。「世界市場」は資本制的生産のあらゆるモメント全體の擔當者であるにもかかわらず、恐慌は「世界市場」にまさにあらわれる。前提は超越されることによつて、前提であることを逆に立證する。

かくて、マルクスの「體系」は、恐慌に導かれざるをえないところの資本制的生産様式の經濟的運動法則を明らかにするとともに、資本制的生産様式の歴史的成立の論理をも包含していつと考えられるのである。

(1) K. Marx; „Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie“, Dietz Verlag, S. 139

(2) マルクス「經濟學批判」二七四頁

(3) マルクス「剩餘價值學說史」第二卷第二部猪俣譯黃土社版二五九頁、以上はマルクスが世界市場恐慌を「資本主義生産の最も錯綜した諸現象」(同上二五二頁)と名づけたことによつても知られる。

(4) 同二六六頁、この場合の原因は „Ursache“ である。これは „Grund“、根據とは區別されねばならない。

四

「資本論」をその核心的部分とする商品から恐慌にいたる「經濟學批判體系」は、資本主義のあらゆる時代を通じての基本的理論でなければならぬ。だが、周期的恐慌に爆發せざるをえない資本主義の發展過程は、ますますその矛盾を深刻化し、ここに資本主義の特殊な段階が形成されることになる。自由競争時代の資本主義は帝國主義に轉化する。資本主義の發展の全過程を包括する矛盾の運動法則とならんで、この段階における矛盾の運動の特徴

を把握することが理論的にも實踐的にも必要となつてくる。

レーニンの「帝國主義論」(一九一六年春にチューリッヒで執筆)はこの要請に即應して書かれたものである。また、ロシア社會民主労働黨(ボ)第七回全國協議會(一九一七年四月)において、一九〇三年の同黨第二回大會で採用された舊黨綱領の改正の主要な問題として、帝國主義の分析がレーニンによつてとりあげられたのもこの事情による。レーニンは「全ロシア四月協議會議決議委員會の意見書について」という論文において、綱領の總論的部分の敘述に關して次のように言つてゐる。

「綱領は、まず資本主義の最も單純な現象から出發して、次いでより複雑な『より高度』の現象に移らねばならない。交換から商品生産へ、大經營による小經營の驅逐へ、恐慌等々へ、そして最後に今日ようやく先進諸國において、あるいは成長しつつあり、あるいはすでに成長を完了した最高の段階としての帝國主義へ移らねばならない。これが實生活におけるありようである。『交換』一般と資本輸出の並置から出發することは、歴史的にも理論的にも間違ひである。」

レーニンは交換から恐慌にいたる上向過程を「一般的分析」と名づけてゐるが、これはわれわれがさきに述べたところの、マルクスの「經濟學批判體系」に相當するものであらう。レーニンによつてもまた、世界市場と恐慌との連關は重視されている。すでに、一九〇三年の舊綱領において、(そして、それを引續ぐ現綱領においても)この點についてふれられてゐるのであるが、「黨綱領の改正に寄せて」(一九一七年十月發表)という論文において、レーニンはソコルニコフの見解を批判しながら重ねて強調してゐる。

「恐慌をもつばら、労働者階級の過小消費ということから説明するのが、ロイドベルトス主義である。けれども古

い綱領は恐慌をそんなことから結論してはいない。すでに前節で述べたような、『技術的進歩』と『生きた勞働力にたいする需要の相對的減少』ということに示されるところの、かような『ブルジョア國家の國內事情』、そこから出發しているのである。そのうえ古い綱領は、それとらんでまた『不斷に激化しつつある世界市場における競争』をあげている。これこそまさに蓄積の條件と實現の條件との矛盾の基本的な點を述べたものであり、しかもずつと明瞭に、いいあらわしたものである。³⁾

レーニンによつても、恐慌は世界市場における諸矛盾の爆發として把握されているのである。かくして、われわれはマルクスの「經濟學批判體系」にレーニンの「一般的分析」と定式化することが出來よう。レーニンは、新しい綱領から「一般的分析」を取除いたり(ブハーリン)、「一般的分析」の中に帝國主義の新しい諸特徴をばらばらに附加したり(ソコルニコフ)することを峻烈に拒否した。レーニンは、反對に、「一般的分析」の後に帝國主義の特徴づけを補足することを擇んだのである。

このことは同時に、「帝國主義論」の位置づけを示していると考えられるのである。そして、この位置づけはその任務と深い關係を持つている。レーニンは、「帝國主義論」の序文において、「本書の基本的な任務はすべての國の、あらゆる餘地のないブルジョア統計の總括的資料とブルジョア學者たちの告白にもとづいて、全世界的資本主義經濟の總括的様相が二十世紀のはじめに、すなわち最初の全世界的帝國主義戰爭の前夜に、その國際的相互關係においてどのようなものであつたかをしめすことであつたし、いまもなおそうである」と、その基本的任務を明らかにしている。それは、「現在の戰爭と現在の政治とを評價するうえに、それを研究しておかなければならぬものをも理解できないところの根本的な經濟問題」の解明である。このような見地から、レーニンは、ブハーリンヤン

コールニコフのように、統一ある「全一體」として帝國主義をえがいたり、また純粹帝國主義を主張したりすると、すなわち、過程の發展段階を無視した、しかも資本主義の基礎を缺いた帝國主義一般——それは組織された資本主義に通ずる——を主張することに反對した。彼等は帝國主義の分析にさいして、「一般的分析」を過去のものとして抹殺してしまいか、或はそれを「一般的分析」に解消してしまいか、の何れかの道しかないもの如く考えた。レーニンは帝國主義の分析を「一般的分析」の補足として、これに直接的に繼續するものとして考えた。こうすることによつて、「一般的分析」は資本主義の始めから終りまで貫くところの法則の解明として把握されるところに、帝國主義の分析は資本主義の最高段階たる一特殊段階の基本的な經濟的諸特質の關聯と相互關係の分析として正しい意義が與えられる。レーニンが指摘する如く、「現行の綱領の總論的部分（一般的分析の部分——引用者）は社會經濟制度としての資本主義の主要な、最も本質的な特殊性を記述し、これを分析している。この特殊性は、帝國主義すなわち金融資本の段階によつて、その本質をすこしも變えはしなかつた」のである。

以上のことは、「一般的分析」が帝國主義の分析の基礎をなすことをまた示すものである。マルクスは、恐慌を新たな歴史的姿態の促進者として擱んでいたことはさきに見た如くであるが、まさに帝國主義は周期的恐慌を通ずる資本制生産の發展における基本的矛盾の激化によつて生じてきた。それはレーニンによつて次のように説明されている。

「資本主義のかつての『平和的』時代が、今日の、帝國主義の時代にかわられるその基礎は、どこにあるかというのを、おもしろくしてみよう。それは、自由競争が資本家の獨占的同盟に席をゆずつたこと、また全地球が分割されたことにある。」⁷⁾

小數者の手における生産の集積、集中および世界市場の不斷の擴大、この兩者はマルクスの「體系」によつて提起される資本制的生産の發展における二つの重要な結論である。レーニンは、生産の集積、集中から出發し、獨占の上に帝國主義の「もつとも深い經濟的基礎」を見出しつつ、列國間での世界の分割にいたる五つの特徴を分析することによつて、プロレタリアートの社會革命の前夜である帝國主義を性格づけたのである。この點は、ローザ・ルクセンブルグがマルクスの資本蓄積に關する抽象的な諸法則から、それも誤謬を含んだ解釋を以つて帝國主義を引出したのと大いに異つてゐる。

マルクスは、すでに一八五八年に全地球をめぐる世界市場の終焉について語つてゐるが、いまだ資本主義社會は上昇線をたどつてゐると指摘した。エンゲルスは、「資本論」第三卷の補足において、世界市場が膨脹してゐるかぎりは産業循環の形態が變化しないことを注意してゐる。マルクスは、「資本論」のその個所において、「十年ごとの循環をなして運動するイギリス産業の發展期（一八一五—一八七〇）には、いつでも、最近の恐慌以前の繁榮期の最高限度が次ぎの繁榮期の最低限度として再現して、それから、さらに高い新たな最高限度に増大する」と述べてゐるのであるが、一八七〇年代を境にして、イギリスの世界市場における工業的獨占が凋落の第一歩をふみだし、生産の集積、集中にもとづく獨占的諸結合が生長しはじめ、そして、二十世紀に入るや、帝國主義の諸特徴が全面的に形成され、全體として資本主義社會は下降線をとりはじめたという事實こそ、まさに注目すべきであらう。かくして、レーニンが「帝國主義は、資本主義一般の基本的諸特質の發展と、その直接の繼續として生じたものである」と語つたことが、歴史的、理論的に如何に正しいものであるかがわかるのである。獨占は自由競争を排除せず、カルテルは恐慌を排除せず、地球の終局的分割はその再分割の不可能性を排除しはしないで、このことによつ

てそれらは多くのとくにするどくて激しい矛盾、軋轢、紛争をうみだすのである。

マルクスの「經濟批判體系」あるいはレーニンの「一般的分析」の後に「帝國主義論」を補足し、位置づけるという意義は右の如くである。

一般的法則を獨占資本主義の諸條件によつて補足し發展させるといふ方法は、スターリンによつてもとられてゐる。スターリンは、資本主義の基本的經濟法則とは剩餘價値の法則であると規定した後、つぎのように述べてゐる。「剩餘價値の法則はあまりにも一般的な法則であつて、その保障が獨占資本の發展條件であるところの最高利潤率の問題にはふれない。この缺陷をおぎなうために、剩餘價値の法則を具體化し、獨占資本主義の諸條件にあてはめてこの法則をさらに發展させなければならぬ。」¹¹⁾ (傍點引者) 當然のことではあるが、「現代資本主義の基本的經濟法則」は、資本主義の「一般的分析」と資本主義の最高の段階、すなわち、獨占資本の段階の特質を究明した「帝國主義論」の總合的把握の上に理論的基礎を置いてゐると考えることが出来るのである。従つて、この法則を「一般的分析」の中にならばばらに解消することは出来ないし、この法則の段階的特質(帝國主義段階)を見落すことも出来ないのである。¹²⁾

(1) レーニン「全ロシア四月協議會議決議委員會の意見書について」教育資料版「ボルシェヴィキ黨綱領について」所收四六一—四七頁。

(2) 同四六頁。

(3) レーニン「黨綱領の改正に寄せて」同六三頁。

レーニンはここで世界市場における競争を重視しているが、マルクスもまたこの世界市場における競争を「世界市場」の問題として重視していたことは確かである。マルクスは「資本論」第三卷第六章第二節資本の價値増大と價値減少、遊離と繫縛を展開

するにあつて、最初に次のように述べている。「吾々が本章で研究する諸現象は、充分に展開するためには、信用業と、世界市場—これは、總じて資本制的生産様式の基礎および生活圏をなす—での競争とを前提とする。だが資本制的生産のこうした具體的諸形態は、資本の一般的本性を把握した後にのみ、包括的に敘述されうる。」(一八一頁、傍點—引用者。なお、ここで言っている基礎および生活圏とはさきに述べた前提および擔當者に相當するものと思われる)更に、第五十章競争の假象の中において、獨立化した諸モメントが諸資本の現實的運動においては逆立ちして現われることを指摘しながら、「個々の資本家相互間の競争でも、世界市場での競争におけると同様に、勞賃・利子・地代の與えられ前提された大いさが、不變的で調整的な大いさとして計算に入りこむ。……たとえば世界市場での競争にあつては、與えられた勞賃・利子および地代をもつてしては、商品は利益を伴つて、すなわち相當な企業者利得の實現を伴つて、與えられた一般的市场價格またはそれ以下で販賣されるか否かということだけが問題となる……」(一二三頁、傍點—引用者)と述べている。

(4) レーニン「帝國主義論」社會書房版レーニン二卷選集第一卷六五八頁。

(5) 同五六—五七頁。

(6) レーニン「全ロシア四月協議會議決議委員會の意見書について」四五頁。

(7) レーニン「第二インタナショナルの崩壊」新生書房版三九頁。

(8) マルクスは「資本論」第三卷(三八四頁)において、資本制生産の三つの主要事象として、(一)、小數者の手における生産手段の集積(二)、社會的勞働としての、勞働そのものの組織(三)、世界市場の成立をあげている。

(9) マルクス「資本論」第三卷七〇九—七一〇頁。ここでは直接的には輸出入統計が問題になつてはいるが、それは現實資本の蓄積に ついての一基準としてとられていたのであつて、たとえば、銃鐵生産高においても同様なことが観取されることを注意せねばならない。(ヴァルガ「世界經濟恐慌史」邦譯第一卷第一部一六七頁参照)エンゲルスは、さきの補足に關聯して、一八八五年十一月十三日付のダニエルソン宛への手紙の中において、イギリスの恐慌の性格變化の主要な原因として世界市場の狀態の變化をあげている。

(10) レーニン「帝國主義論」一七二頁。

(11) スターリン「ソ同盟における社會主義的經濟的諸問題」青木文庫版五四頁。

(12) ここから次のような見解に對する批判が生れてくる。「現代資本主義の基本的經濟法則」を「經濟學批判體系」に還元する見解、その適用範圍を特に全般的危機の第二段階にのみ限定する見解。

本號執筆者紹介

田中眞晴 京都大學助教

山田浩之 京都大學大学院研究科特別奨學生

脇田修 京都大學大学院(文學)研究科特別奨學生

大槻弘 京都大學大学院研究奨學生

吉信庸 京都大學大学院研究奨學生

高寺貞男 京都大學大学院研究奨學生